生の起源説明神話をめぐって

福島秋穂

我国古代の諸文献に載録された神話、就中八世紀の初頭に成立したとされる記紀両書に載録された其れは、それら二書の成立を促した時代的な背景と社会的な要求に基づく其の作成目的に添うべく、民衆の間に自生し、伝承されていたはずの、単純素朴且つ内容明瞭なる神話を恣意的に改竄し、本来別個に独立していたものを結合した結果である故に、私たちは、天皇家の系譜を根幹として、其の枝葉となるべく変改接合されている神話を読む際に、それなりの心構えをもって臨まなければならない。記紀或は其の成立に際し直接の資料となったはずの各種文献が出来する時点において、民族の共有財産であるはずの神話が、少数者の利益を守るべく、取捨選択の篩にかけられ、其のあるものは発生原初段階に有したはずの真の意義を曲げられ、あるものは全く捨て去られて顧みられず、またあるものは其の発生時よりの時間経過に従い生じた真意とは全く異なる解釈を施されて、系譜型神話の構成要素とされるといった具合に、意図的或は無意識的操作を経て、今日に伝えられた結果が、記紀の載録する神話であることを私たちは忘れてはならないのである。

記紀の載録する神話が、其の発生原初の内容・形体に、意識的にであれ、無意識的にであれ、かなりの改竄の手を及ぼされた結果であることは、既に其の構成自体が世界諸民族の伝承する神話に類を見ない系譜――それも、両書成立時における権力者階級の筆頭たる天皇家の系譜――中心であること一つをとっても明白であるが、此の両書に眼を通す時、私たちは其の取捨選択・変改接合の爪跡を随所に見ることが出来るのである。記紀両書の冒頭部に位置する宇宙開闢或は天地創造神話に見られる中国思想の影響――特に、『日本書紀』の書名に示される如く、当時の先進国たる中国を意識して作成されたと思われる紀の冒頭に置かれた神話は、其の全内容が我国民衆の間で自生したものとは思い難い――、其処に登場する神々の恣意的な結合と分離、或は数量の面での整理調整、物語展開の大筋をほぼ同じくする記紀両書の載録する神話の部分的相違から、明らかに一個の纏まりを有する神話の一方の書における欠落、本来出自を異にする天照大神とスサノヲ神の血縁的結合、記における死の起源説明神話の、天皇の生命短少説明譚への変改、等々、其の両書成立に至るまでに為された

取捨選択・変改接合の跡は、暇なく挙げ列ねることが出来る。

私たちは、此のような特色を有する記紀両書に眼を通すに当たり、何処が如何に変改され、物語の何処に我国古代における民衆の思想が表出し、其の意義は真実どのようなものであったのかを、常に見失わないようにすることが肝要である。

*　　*

その載録の仕方に問題はあっても、とにかく我国に存在した多くの神話を載録した記紀両書には、死の起源を物語る話が、イザナキ・イザナミ二神による闘争譚と、天孫ニニギノミコトの婚姻譚の形をとって二つ――イザナミ神による火神の出産と死亡が、所謂代償型の死の起源説明神話であったとすれば三つ――までも見られるのに対し、最初の人間が如何にして此の世に登場するに至ったかを述べた生の起源説明神話が何故か欠落している。[1] しかし、記紀両書に其れが見えないからと言って、此の両書自体が前述した如く、民衆の間に存在した各種の神話を、其の編纂意図に添うべくかなり変改接合しているのであるから、我国古代人の間に人間の生の起源説明神話が全く出来しなかったということにはならないのであって、諸外国の所謂未開・古代人の間において多くの生の起源説明神話が作られ伝承されていた事実、我国周辺の諸国・諸民族の間にも其れが必ずと言っても過言でない程に存在していること、などからまず確実に其れが我国にも存在していたものと思われる。其の具体的形体は判然としないのであるが、記紀をはじめとする我国古代に成った諸文献に散見される「青人草」(記)、「子之一木」(記)、「人木墓」(日本霊異記)等の語、及び古代日本人の植物に寄せる関心の深さから推して、どうやら其れは植物と深い関わりを有したものであった――神が植物を利用して最初の人間を創作したか、或は植物より最初の其れが自生した――と思われるのである。[2] 最初の人間或は其れを昇華せしめたものと思しき神が、植物を媒体として此の世に姿を現わしたとする神話は、我国の周辺にも少なからず見られ、例えば台湾では、最初の人間が岩石から自然発生したとする話が多い中で、祖先神――明らかに人間の祖と思われる――の出現が、

太古パナパナヤント云フ所ニ一柱ノ女神出現ス右手ニハ石ヲ持チ左手ニハ竹ヲ持テリ其名ヲヌヌラオト云フヌヌラオ其持テル石ヲ投ケケルニ石割レテ其中ヨリ人間出テタリ此者長シテ馬蘭社ノ祖トナレリ又持テル竹ヲ地ニ樹テタルニ上ツ節ヨリパコシセル(女)下ツ節ヨリパコマライ(男)ト云フ二神出テタリ卑南社ノ起源ハ此二神ヨリソ始ル[3]

と語られ、また、同じく祖先神の誕生譚の形をとっているが、

古昔中央山脈ノフツホント称スル所ニ頗ル大ナル一樹アリ其名今ニ伝ハラザレド半面ハ木質ニシテ半面ハ岩石ヨリナリテイト珍ラシキモノナリキ木ノ精化シテ神トナリシカ中ヨリ男女ノ二神出現セリ此二神ミトノマグハヒシテ数多ノ子ヲ産メリ[4]

と言われている。此れらは、孰れも神(即ち人間)の出現に、植物と岩石を関わらせていることから、我国の死の起源説明神話の一つである、ニニギノミコト・コノハナノサクヤヒメ・イワナガヒメ三者に纏わる記紀載録神話と少なからぬ関連を有するものと

思われる。一方、アイヌでは、コタンカラカムイが樹木（一説に柳）を用いて始めて人間を造ったと伝えており、[5] 植物を媒介物として最初の人間の出現を説く神話は、寡聞の及ぶ限りでも他に、ルソン島イロゴット族、ミンダナオ島アタ族、パラオ諸島、ボルネオ島カヤン族、ニアス島、アドミラルティー諸島、ニュー・ブリテン島、ソロモン諸島、ニウエ島、バンクス諸島、オーストラリアのヴィクトリア州在住民、インド東北アッサム地方在住民、南米ギアナのアラワク族、グァテマラのキチェ族、アマゾンのワラヤ族、北米アルゴンキン族、同アウイケノク族、中国貴州省安順付近在住青苗族、ウィグル族、アフリカのダマラ族・ズールー族・ヘレロ族・ヌエル族・サンダウ族・同ヘレランド在住民、同じくコンゴやスーダン及びアンゴラ沿海地方在住民、同ザンベジ河流域原住民、北欧ゲルマン民族、等々に伝承されており、我国に此れらの諸地域・住民間に伝えられたのと同様のものが存在したとしても何ら不自然なことではない。[6]

また、我国内にあっては、桃太郎・瓜子姫・竹の子童子・竹姫と、植物より人間の誕生する話が、民間に多く伝承されているが、[7] 此れらは、何らかの理由があって、記紀両書が載録しなかった生の起源説明神話を、民衆が語り伝えたものの残存ではないかと考えられる。そして、記紀両書の冒頭部に登場する葦の芽の神格化された存在と思しきウマシアシカビヒコヂ神やタカミムスヒ神（高木神）なども、恐らく我国における生の起源説明神話と深いところで関わりを持つものであったと思われる。

我国の生の起源説明神話が、自然発生的に最初の人間を此の世に出現せしめたものであったのか、既に見たアイヌの場合のように、超自然的存在態による創造活動の結果、人間が生じたとするものであったか、確証がないため断言は出来ないが、孰れにしても、古代に成立した諸文献中の記事や民間伝承の類から推して、

永峯の高端に水の流れる処がある。其処へ天とうから神様が降りて来られて、人間を造らばいかん——と言はれて、土で女と男を造られた[8]

という喜界島の伝承の如き、生の起源説明神話の一方の型である、創造神による泥土を利しての最初の人類出現譚であるよりは、植物を仲介物とするものであったとする方が、蓋然率は高いと思われる。

叙上の如き観点に立って、此度は、我国の古文献に載録された神話のうちから、二三問題となるものを採り上げ、考察の俎上に載せてみることにする。

*　　*

記及び紀の一書が伝える話によると、天上世界よりオノゴロ島に降ったイザナキ・イザナミ二神は、天（之御）柱なるものを建て——紀本文によると、オノゴロ島其のものを「国中之柱」と見做し——其れを廻って結婚をしたという。此の天（之御）柱に関しては、此れまでに、其の実体について、「八尋殿（ヤヒロドノ）の柱」[9]、「宇宙の軸茎」[10]、「神を招ぐ招代（おぎしろ）」[11]、「陽根」[12] などとする意見や、西欧諸国の習俗中に見られる所謂 May-pole と関連づける説[13] が述べられるといった具合で、其れが何であったのか定まるところを知らない状態にある。また、イザナキ・イザナミ二神が結婚に際し、此の

天(之御)柱を左右より廻ったことについても、「春の祭に東南アジアの原住民、苗族などが木を立てその周囲をまわりつつ歌垣類似の行事を演ずる風習と比較して研究すべきものである」[14]と言い、「我が上代の『歌垣』の原義と相通ずるものを有することは、殆んど疑ひがない」[15]とする如く、其れが我国以外の地に見られる風習と何らかの関わりを有し、しかも我国古代の民衆行事の一たる歌垣とも少なからぬ繋がりを持つのではないかと主張するものの、それでは結婚に際して柱を廻ることに如何なる意義があるのかとなると、誰もが黙して語らず、「夫婦遘合の初に、先柱を行廻こと、上代の大礼と見えたり、此は其男女遘合の始にして、先此礼を行ひ賜ふことは、甚々深きことわり有ことなるべし、されど其理は、伝無ければ、凡人の如何とも測知べきにあらず」[16]とする旧説を、一歩も推し進められない現状にある。

私は既に、此の天(之御)柱が、我国古代人の、植物を清浄なる物とする思想、植物の繁茂する土地を清浄なる場所と見做す思想、を反映させたものであって、其れは本来、結婚の挙行される場を清浄化する目的で立てられ、樹木を象徴していたのではなかったか、と説いたのであるが[17]、ここで再び、イザナキ・イザナミ二神が、結婚に際し、何故其の柱を廻らねばならなかったのかを考える時、私は、インドのオラオン族やムンダ族が、広場の中央に樹木を立て、其れを囲んで踊る風習を有していることなどから[18]、此の天(之御)柱を樹木の代用物であるとすることが許されるとすれば、一歩進んで、此の柱は我国古代人の思想の奥深くで、彼らの有した生の起源説明神話と密接な関わりを有していたものに違いない、と思わざるを得ないのである。

イザナキ・イザナミ二神が結婚するにあたって天(之御)柱を廻ることが、我国古代における結婚習俗の反映であることは、神話が本来民衆の間に生まれ、其れを産み出した人々の日常生活を写すものであることを思えば、まず間違いのないところであるが、其の柱が特に結婚に際して持ち出されていることの背後には、単に其の場を清浄化する意義だけではなく、もっと別の意義、即ち一般民衆間に蔓延する根元的な思想、植物に旺盛な生命力を認める思想、つまりは自分たち人間の祖先が植物を媒体として此の世に出現したとする思想があったのではないだろうか。我国の古代人は、結婚に際して自分たちの生命の根元である植物＝樹木の繁茂する清浄なる土地、生命力の横溢する場所を訪れ、自らの生命力を積極的に増加伸長させると同時に、子孫の繁殖を祈念する目的で、其の周囲を廻ったのではないか。我国における生の起源説明神話が完全且つ明瞭な形で残されていない現在、其の原形体が如何なるものであったかを推し測った上で、実体の明らかならざる天(之御)柱と其れとを軽々に直結させることには、かなりの危険が伴うが、我国古文献の随所に見られる植物に対しての古代人の思想の有り様を思う時、叙上の如き考えも強ち間違ったものとは思われないのである。

我国の古代人は、自分たちの最初の祖先が植物を媒介物として此の世に出現したのだとして、自らの生命に大きな関わりを持つ植物を重視し、結婚の行われる場に其の存在を求めていたのが、記紀載録神話において樹木の代用たる柱と変じているのであっ

て、此の柱が、其の発生の原段階より男根と同一視されていたなどとは到底考えられない。確かに其れが、神話の伝承される一時期にあって、語る者・聞く者の双方に、男根の象徴であるとの暗黙の了解を生じていたことがあるとは、物語の内容が結婚と生殖に関することであるから、充分に理解出来ることではあるが、其れは、時代の変遷に伴って生ずる解釈の変化であって、決して該神話を産出せしめた民衆の意図したものではなかっただろう。同時に、天(之御)柱を、単に「八尋殿の柱」とする説も、あまりに単純素朴、該神話の、それも記紀に載る形での、表面のみを見た一面的な解釈である故に従う訳にはいかない。ましてや、該神話を民衆の間から生まれたものであるとする限り、天(之御)柱を「宇宙の軸茎」・「地軸」などと、高邁な哲学的或は科学的思想に基づいて案出されるが如きものとは解し難い。もし其の本義が真に、「宇宙の軸茎」・「地軸」であったとすれば、該神話は、古代の一般民衆ならざる一部の知識階級の者によって、記紀両書若くは其の資料となった文献の成立時をさして溯ること遠からぬ時期に、中国の所謂天帝思想の影響下に「天の中央に位置する根元神」として生じたと思しき、アメノミナカヌシ神同様に考案されたことになる。しかし、天(之御)柱に関する話は、少ないながらも記紀両書に都合三つ見られ、其のことが何よりも良く天(之御)柱の、一部特権階級の知的思考産物の結果ならざることを窺わせる。

天(之御)柱即ち「神を招ぐ招代」とする説は、天(之御)柱の解釈中にあっては、最も賛同し易いものであるが、此れも、其の招代を何故イザナキ・イザナミ二神が結婚に際して廻らねばならないのか、明解の出されない限りでは、残念ながら従うわけにはいかない。

我国古代の人々が、植物に生命力の横溢を見、其の生命力を自分たちの生命力・活動力と結びつけて考えていたのではないかと思われることは、他にも幾つか例証のあることである。

コノハナノサクヤヒメが其の子を出産する件について、紀一書の載録する神話が、「以ニ竹刀一、截ニ其児臍一」と記している竹刀による新生児の臍の緒の切断は、既に先学が明らかにした如く、『塵添壒嚢鈔』巻第二「臍緒(ホソノ)、以ニ竹刀(チクタウ)一切事」条や、中山忠親の『山槐記』治承二年十一月十二日の安徳天皇誕生の記事中にも見え、我国では、古くから其の切断に金物や石を用いることを嫌い、竹篦(刀)や葦を用いることが多かったようであるが、此のことなども、東ニュー・ギニアの住民に、臍の緒を如何に始末するかと問うたところ、「自分デ切ルサ。竹ベラヲ作ッテ切ル。ソシテ余ッタノハ後産ノ物トイッショニ産屋ノ横ニ埋メル」[19]と答えていること、同じニュー・ギニアの東北部に伝承された死の起源説明神話に、人間が竹を利用して造られたが故に、本来不死身であるはずのものが死なねばならないのだ、とするものがあることを考え[20]合わせると、新たに生まれた子供の生命が長久であれ、との願いを込め――所詮は、人間の祖が植物と密接な関係を持つ故に死なねばならないのだとしても――其れが有する生命力の、新生児への転移を目的として、我国古代人の間で自分たちの命の始まりとなった物と考えられた植物、或は其の一種としての竹で作られた刀が利用されていた風習の反映ではないかと思われるのである。

臍の緒を切るに、他にも其の用に当てるべき物が多いなかで、特に竹或は他の植物が選ばれたことは、其れが手易く入手出来るとか、単なる思い付きによるということではなく、古代人に其れなりの思想的裏付け、根拠があってのことだろう。

また、記中巻の末尾に載る秋山之下氷壮夫と春山之霞壮夫の闘争譚は、其の前後の物語との関わり方や其の語る内容が、記の中・下巻が神代に続く人代の物語になっているのに比して、明らかに神々の物語と見做し得る異質なものであることから、記の編纂者が、其の全体的構成という観点から、上巻の末尾に位置する所謂山幸彦と海幸彦の闘争譚と調子を合わせるべく当該個所に編入したもののようであるが、此の闘争譚に、伊豆志河の河石を取り、塩で合えて竹の葉に包み、其の竹の葉が青くなるように、また萎えるように、青み萎えよ、と秋山之下氷壮夫が呪詛されたとあるのも、植物即ち竹に自分たちの生命力が大いに関連しているのだという考えが、植物を用いて新生児の臍の緒を切る習俗と同じく、此の物語を産み出した人々の間に存在していた結果ではないかと思われる。本論冒頭部に引いた台湾の生の起源説明神話に、竹より祖先神が出現したとあるのも、何か我国の生の起源説明神話と深い関連があることなのかも知れない。

此処に至って、我国の生の起源説明神話に現われていたはずの植物が、台湾やニュー・ギニアの生・死の起源説明神話の如く、竹其のものであった、とまでは断言出来ないが、我国古代人の間で、植物が最初の人間誕生のために必要にして不可欠なものであったと考えられていたのではないかという疑いは、益々深まるのである。

アメノウズメが、岩屋に隠れた天照大神を誘い出すべく舞踊を行った際に、日影・真拆・小竹葉（記）、真坂樹・蘿（紀本文）、莫辟葛・蘿葛・竹葉・飫憩木葉（古語拾遺）等、植物の名が多く挙げられていることも、当該神話全体の解釈が判然となされていないところで、軽々に結論を出すことは出来ないが、それらが天照大神の出現（再生）をはかるべく、其の場に生命力を横溢させるために使用されたものだとすれば、我国の生の起源説明神話において植物が果たしていたに違いない役割と、一脈相通ずるものがあるのではないかと思われる。

更に、スサノヲ神の大蛇退治譚に、「於二湯津爪櫛一取二成其童女一而、刺二御美豆良一」（記）と、また、「化二奇稲田姫一、為二湯津爪櫛一、而挿二於御髻一」（紀本文）とある記事も、黄泉国からのイザナキ神の逃走譚において、櫛が追跡者に向けて投擲されていることを考えると、単純に、「クシイナダヒメといふクシの美称を櫛にとりなしたところから、思ひつひたものであらう」[21]と片付てしまう訳にはいかず、もっと物語の背後にある古代人の思想を窺い見なければならないと思われ、結局のところ、我国古代の櫛が実用的な面で些か欠けるところの多いものであったらしいことからも[22]、此れは、我国古代人が櫛に一種の降魔力を認めていたことの反映であると解されるのであるが、何故我国の古代人が櫛にそのような呪力ありと認めたのかとなると、やはり其れが本来植物で作られるものであり、植物が人の生命力と深い関わりを有するものであったからとせざるを得ないのである。スサノヲ神は、其の持て

る力を補強する目的で、櫛を身に付けたのである。

叙上の如く見てくると、イザナキ・イザナミ二神の結婚と其れに続く生殖活動の物語に登場する天(之御)柱は、明らかにある呪的な力能を有するものとされていたが故に、其の場に欠くべからざるものとして、持ち出されていることになるが、其の呪的力能の何たるかは、まず其れが生殖に関連するものであること、其の場の状況からいって間違いない。とすれば、やはり其れは、古代人の思考の内にあって、人の生命と深く関わり合っていたものではないだろうか。もし此の考えが許されるとすれば、これまでに見たような、植物と人の生命を結びつける思想に出でた習俗や物語の例から推しても、其れは、我国の生の起源説明神話において、最初の人間が植物から誕生したと語られていたことと、軌を一にするものではなかっただろうか。此の考え方に基づくならば、私たちは、柱即ち樹木が、其の場を清浄化する目的で立てられたとする考えを、更に一歩前進せしめることになるのである。

＊　＊

次に考察の俎上に載せてみるべきものに、「根国」なる語がある。此の語は、記紀載録神話に、執れもスサノヲ神と関連したものとして、「妣国根之堅州国」・「須佐能男命所レ坐之根堅州国」(記)、「遠適二之於根国一矣」・「令二下治二根国一」・「極遠之根国」・「欲レ従二母於根国一」・「就二(於)根国一」・「底根之国」・「衆神処二我以根国一」・「帰二根国一」・「入二於根国一」(紀)と見え、更に、『古語拾遺』に「退二去於根国一」・「就二於根国一」と、また道饗祭の祝詞・大祓詞に「根国底(之)国」と繰り返し記されている。

此の根国については、記紀載録神話に其れが頻出するのみならず、我国の他の古文献にも散見されることから、其の語義及び其れを何処に比定するかで、種々の説が唱えられてきたが、数の上で最も優勢な説は、此の根国が、スサノヲ神により「妣国」の語を冠せられ、しかも記の大国主神による根国訪問譚中において、其処に「黄泉比良坂」があるとされていることにより、此れを死者の国たる「黄泉国」と同一視するものである。[23] また、此の根国は、今日民俗学の方面から、南島地方特に沖縄の「根」を意味する語「ニー」及び其れに関連する「根所(ニードゥクル即ち一族の本家)」などの語を援用しつつ、沖縄人の他界観に、海の彼方の理想郷として現われる「ニルヤ」・「ニライ」と結びつけても解釈されている。[24] そして此の解釈は、前記した根国即黄泉国とする解釈が、「天(之御)柱」即「八尋殿の柱」とする説同様、古文献の記載する根国に関しての物語を、全て単純素朴に鵜呑みにした結果の、どちらかと言えば幼稚とも言えるものであるのに比し、私たち日本人の祖先が日本列島外からある時期に移動してきたと考えられていることにより、また南島地方の言語に生きる古代日本語、という些か浪漫的情緒も手伝ってか、根国の語義としては、まず決定的なものと見做されているかの如き感がある。しかし、此の説が古文献に見える根国を全て合理的に説明し得ているかというと、必ずしもそうとばかりは言い切れぬようで、考えてみるべき余地は未だ充分に残されているのである。

根国の語義に関する説のうち主要なものは、ほぼ上記の二つに尽きるのであるが、此の国が一体何処を指しているのかとなる

と、諸説紛々として定まるところを知らないのが現状である。

例えば、此れを我国内の一地域とするものに、「後世島根、大根島等にその名残を留めている出雲宍道湖中ノ海に沿う、南方一帯の地」とする説[25]、同じく「大根嶋是なり」とする説[26]、「山陰道出雲伯耆地方と見て可なり」とする説[27]、「今の島根半島殊に嶋根、秋鹿両郡あたりを意味するのではないかと推定している」という説[28]、等がある。此れらの説は、其れが比定する地域に大小の違いはあるが、其の孰れもが出雲地方に其の地を求めることでは共通したものを持っていると言える。此れに対し、当然のことながら「日本海のあなたの大陸[29]」と、国外に其の地を見出そうとするものもある。

このように「根国」の語義・所在が判然としない原因の一つは、其れが見た如く我国の古文献に頻出し、しかも其れが、「妣国」・「堅州国」・「極遠」・「底」等の語を伴って用いられていることにあると思われるが、何よりも混乱を招いている大きな原因は、根国に対する我国古代人の考え方に、幾段階かの変化があったと思われることを考慮せず、前記した根国をすべて、其の語が見られる記紀載録神話の物語展開に従い、若しくは、『古語拾遺』・祝詞の文面から、或は表記文字から、推し測ろうとしていることにあると思われる。しかし、スサノヲ神の発言に、「妣国根之堅州国」とあり、「妣」は「亡き母」を意味する語であり、スサノヲ神の「亡き母」と言えば、イザナミ神のことであるから、「根国」は黄泉国である、とか、記載録神話中の大国主神の根国訪問譚では、スサノヲ神が確かに根国に登場し、其の世界の最果てと思しき所には、イザナキ・イザナミ二神の闘争譚で黄泉国と現し世の境界にあるとされた黄泉比良坂まであるではないか、根国即黄泉国であるとすると、「堅州国」は文字通りの「堅い土の世界[30]」である、とか、いや其処は「極遠之根国」とされているのであるから、「堅州国」の「堅州」は借字であって、本当は、「片隅国[31]（カタスミクニ）の意」である、などと主張する説に、一体どれほど我国古代人の根国思想、少なくとも其れが発生した原初段階において、其れを発生せしめた一般民衆が抱いていた根国に対しての考え、が反映されているのか、となると其の正当率は極めて低いものであると言わざるを得ないし、記の当該語彙が文献に記載される時点で、其の記録者・編纂者が有したはずの根国思想――此れは、当然のことながら、発生原初段階における其れとは異なったものであっただろう――について一言半句の断りもなく、「妣」を文字通り「亡き母」即ちイザナミ神のことと解しながら、「堅州国」の表記は借字であるとする如き解釈（例えば本居宣長や次田潤の其れ）に直ちに従う訳にはいかない。また、記の「妣」なる文字についても、紀では「母」と記しているのに、一方的に記の表記だけを何故重視するのか、紀の本文及び一書の載録する神話においては確かにスサノヲ神がイザナキ神を父に、イザナミ神を母にして誕生しているが、其の紀本文が、父母二神のスサノヲ神に対する言を、「汝甚無道。不レ可二以君臨宇宙一。固当遠二之於根国一矣」とし、一書も父母のスサノヲ神に対する言葉として、「汝可二以馭二極遠之根国一」なる表現を記し、しかもイザナミ神と根国とを全く結合させていないのに、何故「妣」・「母」をイザナミ神のことであるとするのか、更にまた

前記二書はイザナミ神とスサノヲ神を親子関係にあるものと見ているが、スサノヲ神の誕生譚は他にも幾つか存在するのに、スサノヲ神の母はイザナミ神であると、異伝に対する些かの配慮考察もなく何故断定するのか、「妣」・「母」なる表現は確かにスサノヲ神の発言中にだけ見られるのであるが、此れは果たして「スサノヲ神の妣」・「スサノヲ神の母」の意で用いられているのか、等々、従来の根国即黄泉国とする説に同意するには、其れがあまりに多くの疑念を抱かせることを指摘せざるを得ないのである。

また根国を沖縄の人たちの考える海の彼方の理想郷ニルヤ・ニライと結びつけて考える説は、現在、根国の解釈としてほぼ定説化した観があり、「妣」・「母」なる語をイザナミ神と切り離し、其れを記紀載録神話の物語展開とは別個の独立したものとして考察しながら、根国に冠せられた「(極)遠」の表記をも満足させるといった具合に、前述した根国即黄泉国なりとする説に比して、格段に優れたものであり、根国の意義は、「民族が出自したと観ぜられ且つ信ぜられた本郷・本つ国を意味した」[32]とする発言により、其の全てが明白となった感がある。しかし、それでは、沖縄の人たちが何故海の彼方の理想郷をニルヤ或はニライと言ったのか、我国の古代人が自らの属する民族の出自したと信ずる処を根国と称したのか、となると、今もって一向明らかになってはいないのである。

私は、根国が沖縄人の所謂ニルヤ或はニライと深いところで一脈の関連を有するものであることを此処で否定し去るつもりなどは毛頭ないが、我国古文献に記載された根国が、其の発生原初段階にあっては、前に其の存在について考えた、最初の人間が如何にして此の地上に姿を現わしたのかを説明する神話、即ち生の起源説明神話と大きく関わり合っていたのではないか、我国古代人の考える生の起源説明神話が、植物を媒介物として最初の人間を出来せしめるものであったことと、彼らの有した根国思想とは、密接に結合ししていたのではないか、と考えているので、以下に其の考えを記してみることにする。

原初、超自然的存在態による創造活動によるのであれ、自然発生によるのであれ、最初の人間の出現に大きく貢献した植物、其の植物の生命の根元・大本であるところの「根」、此れを我国の古代人は自分たちの最初の祖先と結びつけて考え、「根国」なる語――「根国」とは言っても、此の言葉の中心は「根」そのものにあったと思われる――を案出し、自分たちに共通の思想上・心理上の故郷、自分たちに共通する、全ての人間の系譜を溯って辿りつく最初の祖先の生じた国としたのではないか。

孝霊・孝元・開化・清寧・元明天皇以下数代の天皇名に、「根子」の文字が見られ、また宣命中に代々の天皇が、「倭根子天皇」と記されている。此の根子を通常は尊称と解するのであるが、記紀中の人名に、大田田根子・難波根子・山背根子、等々のあることを思うと、此の「根子」本来の意義は、あるいは人間の生命力の源泉を植物の根に認めた古代人の思想の反映、即ち植物の有する生命力を身体に転移させる目的に出でた命名、ではなかったかと思われる。

スサノヲ神に関して記された「妣」・「母」の文字が、記の上巻末尾に見られる「稲氷命者、為二妣国一而、入二坐海原一也」という表記

の「妣」即ち稲氷命の生母たる豊玉毘売である如くに、イザナミ神と直結するものでないことは、今更言うまでもないことであるが、「母即ち祖先を誕生せしめた植物の根源」の意であった「母国＝根国」が、根即ち地下に存在するものであること、そして此の語が、たまたまスサノヲ神と結びついていたこと、によって、記或は其の資料となった古文献の編纂者により、スサノヲ神が「母国根国」と発言する系譜型神話の発展段階の途中で、スサノヲ神の母は既に死亡したイザナミ神であるとされ、「母」は「妣」と記すべきであるとの解釈を施され、同時に、我国における生の起源説明神話の語る内容と根国の関連が薄れるに従って生じた、根国は地下にあり、との新たな合理的解釈に基づいて、「根国」の語に付加されていた「堅州国」の表現を伴ったものが、今日私たちの見る「妣国根之堅州国」ではないか。根国に付された「下」・「底」・「底(之)国」の如き表記も、此れと同様の過程を経て生じた、根国に対する第二次的解釈の結果であろう。根国と生の起源説明神話とに本来共通していたはずの思想、即ち古代人の、自分たちの最初の祖先を誕生せしめた植物、其の植物の生命力の源、つまり自分たちの祖先と同一視し得る「根」、自分たちの生命と繋がる「根」に対しての認識、が希薄なものとなって、叙上の如き新たな解釈が次々と生まれる一方において、根国即ち母国は、自分たちの祖先が実際に居住し、其処から現在自分たちの生活する場所へ移って来たと考える地理上の一地域を想定した結果、「(極)遠」の如き表現が生じ、また、スサノヲ神の統治すべき領域を、紀の本文及び其の一書が、「根国」とするのに、別の一書と記が、「(滄)海原」と記すに至ったのではないか。記紀載録神話が文献に記載される頃に、自分たちの遙かな祖先が海を渡って現在住む場所に到達したのだという微かな記憶、若しくは伝承に基づき、大陸への渡海・交通という具体的な事象・経験も手伝って、我国古代の人々が、其の先住地を海の彼方に想い描き、其れが「(滄)海原」という形をとって古文献に記されたのではないだろうか。根国と南島地方の諸言語が、共通するものを持つとする考えが、「根国」の語義として正当な解答となり得るのは、此の時期以後の「根国」に対してであろう。

叙上の如く考えるならば、根国を実際の地理上の地域に比定しようとする努力は、記紀載録神話の形成時までに起こった幾度もの我国古代人の根国思想の変化、其の変遷の一時期、それも諸文献の成立時に最も近い時期における解釈としては正しいものであるとしても、其れが我国古代人の抱いた根国思想の十全なる理解に繋がるものでないことは言うまでもない。根国に実際の土地を比定しようとする努力は、全く無駄なことではないと思うが、それよりも大切なことは、我国の古代人が、「根国」なる語を案出した時、何を考え、此の語に如何なる感懐を持ったかということではないだろうか。恐らく古代の人々は、此の語を耳にする時、「心の故郷」といった感懐を抱き、気持ちの安らぎを憶えたことだろう。

大祓詞中の「根国底之国」という表現は、「底之国」とあるのを見れば、前に記した如く根国思想が幾段階かの発展を遂げた後のものであると知れる——同詞中においては、「根国底之国」が、

「大海原」とも少なからざる関連を有するかの如く述べられている――が、此の「根国底之国」が、あらゆる罪禍を送り込むための場所とされているのは、根国が、「穢国」（記）黄泉国と同一視された結果か、未だ根国が、最初の人間と関わりある植物、生命力横溢し不浄を祓うに最適のものと見做されていた植物――私たちは其の具体例を、イザナキ神の禊祓が筑紫日向之橘小門阿波岐原（記）、筑紫日向小戸橘之檍原（紀）で行われたことに見ることが出来る――、と密接な繋がりを有する所と考えられており、全ての汚穢不浄が其処で清浄化されるとの意識に基づいた結果か、の孰れかなのだろう。道饗祭祝詞における「根国底国」は、既に黄泉国と何ら異ならぬ所とされている。

記紀載録神話と祝詞の文面に見られる根国思想の成立・変化の先後関係に対する考察を全く抜きにして、後者の表記するところを根拠に根国を、「この世とは同じでない原理の支配する隔絶した下方の国という観念がその中心を為すものであったらしい」[33]とし、「記紀時代にはすっかり地下の陰惨なヨミノクニ、ヨモツクニと混同され同一視せられた根の国も、かつては海洋的性格を帯びていた」[34]とするものが思いの外に多いが、古文献に記された根国の表記及び其の語が意味する世界の種々相より推して、我国古代人の根国思想に幾度かの変遷があったことを知る私たちは、そもそも根国が如何なる思想に端を発するもので、其れが各種古文献に載録されるまでに、どのような変化の過程を辿ったのかを、今少し慎重に考えてみる必要があるのではないだろうか。

*　　*

人間の生・死の現象は、古代人の間における一大事件であり、其れが古代人一般の思想形成に及ぼした影響には計り知れないものがある。此処では、其の本来の意義が解明されていないと思われる「天(之御)柱」と「根国」を考察の対象に採り上げ、人間の生の現象、特に我国における最初の人間の誕生、という観点から意見を述べてみた。

注

1　拙稿「死の起源説明神話」――『国文学研究』第四七集参看。

2　拙稿「記紀載録神話に於ける生と死の起源説明神話」――同上誌第三八集参看。

3　臨時台湾旧慣調査会第一部『蕃族調査報告書』――卑南族卑南社――一頁。

4　同上書――紗績族霧社蕃――四頁。

5　ジェー・バチェラ著『アイヌ人及其説話』上巻八四頁、金田一京助著『アイヌの研究』二一六―二一七頁、知里真志保著「アイヌの文学」四頁――『岩波講座日本文学史』第一六巻。

6　三品彰英著「日本神話論」によれば、「人間の初現をはじめ植物の類から観想する神話の類型は、東南アジアやオセアニアにまで広がる古い栽培民文化のうちに辿ることができる」という（『岩波講座日本歴史』第二三巻三四〇頁）。

7　関敬吾著『日本昔話集成 第二部 本格昔話 1』三二八―三六六頁参看。

8　岩倉市郎著『喜界島昔話集』一七一頁。

9　本居宣長著『古事記伝』四之巻。同様の解釈をするものに、松岡静雄著『日本古語大辞典』語誌、次田潤著『古事記新講』三〇頁、武田祐吉著「古事記」――『武田祐吉著作集』第四

巻一三一頁、尾崎暢殃著『古事記全講』三五頁、などがある。

10 白鳥庫吉著『神代史の新研究』一四七頁。同様の解釈をするものに、『シンポジウム 日本の神話』第一巻八九頁における大林太良発言や、「地軸」とする飯田季治著『日本書紀新講』第一巻三四頁、などがある。

11 北野博美著「性の芸術化・民俗化」――『民俗芸術』第二巻第五号二〇頁。同様の解釈をするものに、松本信広著『日本神話の研究』一八一頁、松村武雄著『日本神話の研究』第二巻二一九頁、吉井巌著『天皇の系譜と神話』二八一頁、などがある。

12 神田秀夫著『古事記の講造』二四九頁。同じ解釈をするものに、橘守部著『稜威道別』巻三があり、前注の前二者は、「天(之御)柱」に男根のイメージが重なっていることを認めている。なお、津田左右吉著『日本古典の研究』上巻は、此れを男根の象徴とすることに反対している(『津田左右吉全集』第一巻三五二頁)。

13 竹友藻風著『詩の起原』八五―八六頁、松村武雄著「上代文学と神話伝説」――『上代日本文学講座第三巻 特殊研究篇 下』八六頁、荻原浅男著『日本神話の旅』二〇頁、など。

14 松本信広著「神話伝説」――『現代のエスプリ』第二二号三一頁。なお、同じ著者による『日本の神話』一三四頁、「苗族の春の祭と柱」――『民俗学』第五巻第三号一九〇頁、「説話・伝説」――『日本文学講座Ⅰ 古代の文学 前期』一〇三頁、及び『稲の日本史』下巻(筑摩書房版)一九一頁における発言等参看。

15 松村武雄著前掲論文――前掲誌八六頁。同様の考え方をするものに、和歌森太郎著『日本民族史』六九頁がある。

16 本居宣長著前掲書四之巻。

17 拙稿「古代の心」――『国文学研究』第四九集五四―五五頁。

18 フレイザー著・永橋卓介訳『金枝篇』㈢・四三頁。

19 豊臣靖著『東ニューギニア縦断記』一一六頁。

20 大林太良著『日本神話の起源』(角川新書版)二二七頁。

21 津田左右吉著前掲書――『津田左右吉全集』第一巻四五二頁。辻春緒著『日本建国神話之研究』が支持した(三三四頁)此の解釈は、早く新井白石著『古史通』巻之二に見え、松岡静雄著『紀記論究 神代篇四 出雲伝説』は、白石説を排し、昔、頭髪に物品を隠匿する風習が存し、其れが此の個所に反映したのだろう(二一七頁)とした。なお、此のことについて、中山太郎著『日本民俗学 随筆篇』は、人身供犠の犠牲者を串に挿したのだ(一八五頁)と言い、城戸幡太郎著『日本古代人の世界観』は、「櫛を稲田に刺して凶荒を除くといふことの神話的表現である」(一九五頁)とし、松村武雄著「日本神話の諸問題」は、神や英雄が危難に瀕した乙女を救う際に、此れをある事物に変形し身に帯びる例は、多くの民族に見られるとし、其れが、「乙女に内在する呪力の作用によって闘争を有利にするため」であると説いている(『国文学 解釈と鑑賞』第二〇巻第九号二〇頁)。日本古典文学大系67『日本書紀』上・五六三頁頭注、及び金子武雄著『古事記神話の構成』九五頁

は、孰れも、櫛に魔除けの呪力があったのだ、としている。

22 後藤守一著「古事記に見えた生活文化」――坂本太郎編『古事記大成』第四巻歴史考古篇三〇三頁。

23 根国即黄泉国なり、とするものに、卜部兼方著『釈日本紀』巻六があり、他に、一条兼良著『日本書紀纂疏』の「根国者。黄泉之名。草木之根荄皆生於地。故名地下為根国。猶言地獄也」（巻第二）という説を初めとして、此れを敷衍した龍野熙近著『古語拾遺言餘抄』上巻、本居宣長著前掲書七之巻、橘守部著『山彦冊子』巻一、鈴木重胤著『日本書紀伝』六之巻、飯田武郷著『日本書紀通釈』巻之四、久保季玆著『古語拾遺講義』、桜井時太郎著『国史大観』第一巻六九頁、次田潤著前掲書八二頁、津田左右吉著前掲書――『津田左右吉全集』第一巻三九一頁、金子武雄著前掲書一一一頁、等があり、池辺真榛著『新訂古語拾遺新註』は、「大地の底辺（ソコヘ）に有る幽界（カミグニ）なり」（五九頁）としている。根国即黄泉国なり、とすることに反対するものに、荷田春満著『日本書紀神代巻劄記』巻第一中及び別本、栗田寛著『古語拾遺講義稜威男健』一一〇頁、溝口駒造著『古語拾遺精義』一八〇頁、松岡静雄著前掲辞書語誌、等がある。

24 柳田国男著「海上の道」――『定本柳田国男集』第一巻六五―六六頁、高崎正秀著『文学以前』一二三頁、松村武雄著前掲書第四巻三七八頁、三品彰英著「日本神話論」――『三品彰英論文集』第一巻二四四頁、西郷信綱著「オモロの世界」――日本思想大系18『おもろさうし』六三四頁、等参看。

25 中田薫著『古代日韓交渉史断片考』一二四頁。

26 敷田年治著『古事記標註』上巻之中。

27 吉田東伍著『日韓古史断』三五頁。

28 三谷栄一著『日本神話の基盤』一五〇頁。

29 鳥居龍蔵著『日本周囲民族の原始宗教』三〇五―三〇六頁。溝口駒造著前掲書によれば、鳥居博士は、朝鮮半島を根国と考えていたもののようである（一七七頁）。

30 尾崎暢殃著前掲書八六頁。他に同じ考え方をするものに、武田祐吉著「蛇の比礼（古事記）」――『国文学 解釈と鑑賞』第二巻第八号二頁、がある。

31 本居宣長著前掲書七之巻。同じ考えを述べるものに、橘守部著『山彦冊子』巻一、次田潤著前掲書八二頁、同『祝詞新講』三二一頁、敷田年治著前掲書上巻之中、池辺義象著『古事記通釈』六八頁、松前健著『日本神話の新研究』三三頁、西郷信綱著『古事記の世界』六三頁、安本美典著『邪馬台国への道』一二一頁、上田正昭著『日本神話』一〇六頁、同『日本の原像』一八九頁、等がある。なお、植木直一郎著『古語拾遺新講』は、「根国」には「黄泉国」の義と「片隅国」の意があり、後者を「中央でない辺僻の国、即ち極悪い辺鄙の土地をいふ」とし、前者とは別世界と見ている（一四―一五頁）。

32 松村武雄著前掲書第四巻三七八頁。

33 太田善麿著『古代日本文学思潮論』第二巻一八二頁。

34 松前健著前掲書三三頁。